

本校の学力調査結果と指導改善内容について

本校では、毎年春に第6学年が全国学力学習状況調査（国語・算数）を、また第3学年～第5学年がCRT学力到達度検査（第5学年は国語・算数、他の学年は算数）を実施し、子どもたち一人ひとりの学力の定着状況の把握とともに、教職員の指導方法の改善に役立てています。



今年度の調査結果とその分析ができましたので、以下のとおりお知らせいたします。

【全国平均との比較】

- ・ どの学年も、おおむね全国平均と同等の正答率でした。
- ・ 昨年度調査では、A問題（知識）に課題が見られた学年も一部ありましたが、今年度は改善が見られ、特に問題はありませんでした。

【課題と対応】

- ・ どの学年も「関心・意欲」にかかる質問に対する数値が低い傾向が見られました。どちらかと言えば謙虚で遠慮がちな子が多いように感じます。また、子どもの興味や関心を大切に、学ぶ意欲を引き出す授業に心がけていく必要があると考えています。
- ・ 日記や作文などにはどの学年もこまめに取り組んではいますが、長文を書くことに慣れておらず、抵抗感を持っている子が多いようです。長文を書く、400字程度に自分の考えをまとめるといった学習を計画的に取り入れていく必要があると考えています。
- ・ 表やグラフの読み取りはできるが、そこから分かることをまとめて書くといった学習が苦手な子が多いようです。算数以外の社会や理科の学習の中でも、表やグラフの読み取りや分かったことをまとめる活動を丁寧に扱っていくことが大切であると考えています。

【確かな学力を身に付けていくために】

本校では、今年度の学校づくりビジョンの中に以下のような学力向上にかかる重点目標を掲げ取り組んでいます。

- 朝の学習による基礎・基本の定着
- 「家庭読書」及び学年に応じた「自分学習」の推進
- ホワイトボードを活用した「聞いて、考えて、伝え合う」（言語活動）の充実
- 毎日行う授業において、学習のめあてをきちんと示し、学習のまとめ（振り返り）を丁寧に行う。



子どもの心が元気に育つためには「自尊感情」が大事です！

「自尊感情」という言葉をお聞きになったことがあるでしょうか？よく似た意味の言葉に「自己肯定感」というものもあります。

「自尊感情が育っている人」とは、いわゆるプライドが高い人というのとは真逆で、ちょっとやそっとの困難では揺るがない、強い自分を持っている人のことです。失敗にめげず「自分ならできるはず」と、粘り強く取り組むことのできる人のことです。



どうやったら「自尊感情」を育てることができるのでしょうか。

① 他者を攻撃するのは、自分に自信や安心感がないことの裏返し

ありのままの自分に対して自信や安心感がないことを「自尊感情」が低いと言います。こういった子どもは、不安感が強く、やる気や意欲の低下が見られたり、不登校やいじめ、学級崩壊の要因になったりするケースが少なくありません。「自分はダメな人間だ」と思うことで、逆に強がって人を攻撃したり、問題行動につながったりする場合があります。

ですから、問題行動に対する対処療法的な指導と同時に、以下のそのような子どもの自尊感情を高めるために根本的な対応が必要となってきます。

- 心の居場所をつくる（自分はこのままでいいんだという安心感を持たせる）
- 人として尊重する（自分も相手も一人の人間として大切にされるべきことを教える）
- ほめる（その子なりの努力・成長、よさをほめ、自分の個性や能力を自覚させる）

② 子どもの「よさ」を見つけ、大きく価値づける

「欠点」や「悪いところ」は、よく目につきますが「よさ」は、大人によさを探そうという心がないとなかなか見つけられないものです。「よさ」を見つけてやろうという大人の意図的な明確な意思がなければ、絶対に目に留まることはないのです。

つまり、まずは子どもの「よさ」を見つけてやろうとする大人の心の持ちようが、決定的に大事であるということです。

③ 「価値ある言葉」を示し、子どもの中へ浸透させるように努める

これまでは、自分の非を認めず一方的に言い訳や攻撃をしていた子が、自分の思い通りにならないことがあっても、ふて腐れた態度を取らなくなってきた。

これは、自問自答ができるようになってきた表れで、その子の中にプラスの考え方や行動につながる「価値ある言葉」が入ってきたからと言えます。

大人が、さまざまな場面で子どもをほめて価値ある言葉を示し、それを子どもの中へ入れていくよう努めなければなりません。

あまりよい例えとは言えませんが、「人は馬を水辺に連れて行くことはできるが、馬に水を飲ませることまではできない。」という話があります。大人にできるのは、子どもに「働きかける」ことだけです。その「働きかけ」に対して、子ども自身が「自分を変えようと思い」そして「自分で変わる」のです。

ここに「さまざまな場面で子どもをほめて価値ある言葉を示し、子どもの中に浸透させるよう努める」ことの重要性があります。